

フィンドレー大学への協定留学 月例報告書 (11月分)

静岡文化芸術大学 デザイン学部 デザイン学科 3年 桑原大樹

11月は、何もない1か月であった。毎日授業に出席し、課題をやりながらアメリカ人の友人と駄弁り、共に夕食を摂り、またまた課題をやりながら駄弁って、帰って寝る。もちろん小さなイベントはいくつか(例えばおにぎりを作って各国からの学生に振舞う等)あったが、それらも日常の一部になってきていて、あえて報告書に書くようなトピックには感じない。アメリカ人の友人と比較して格段に課題の少ない私は、彼らが課題をやっている間イヤホンをして映画を観る。すでに20本ほど見ただろうか。簡単な英語が使われている映画を選んでも、集中して見ると中々に疲れる。

とはいえ、こうした日常に不満があるわけではない。刺激のない、退屈な生活を送っていても、そこには間違いなく言語学習が在って、日々それを意識して生活していることで、語学力は確実に身につけてきている。要は、慣れたのだと思う。日本での大学生活でも、そこに数多のイベントがあってなお、すべてが日常であった。住み慣れた母国では、非日常ですら日常になる。そういう意味で、留学が始まってからの数か月はすべてが真新しい、まさに非日常であったが、それが日常となった今、日本にいた頃と同じように、ただただ毎日を生きている。

日々を生きる中で、ふと考えたことがある。思えばこれまで、私とはにかく「留学中にしかできない経験」に必死であった。英語学習という面而言えば、個人的な文法学習や発音の練習は日本でもできることであって、せつかくアメリカにいるのだから、とにかくアメリカ人にガンガン話しかけて、その中から新しい単語や表現を見つけたいと、そう考えていた。しかし、必ずしもアメリカでしかできない経験が最適だとは言えないかもしれない。単語にしろイディオムにしろ、家で時間を確保してしっかりインプットするようにして、それを外でネイティブ相手にアウトプットする方が効果的なのではないだろうか。外国語学習の方法として有名なものの1つに「映画のセリフを完コピする」というものがある。映画が好きで私にとっても最適な方法であるが、日本でもできることだろうとなんとなく敬遠していた。しかし、アメリカでの生活が日常になるにつれて、これらもその日常に組み込むべきだと考えるようになった。そもそも、アメリカでしかできない学習法、というものの自体見つけることが難しい。授業も日本在住のアメリカ人教師にも展開できるものだし、ネイティブの学生にもそれぞれ自分の専攻があって、我々の英語学習に長時間付き合えるような人はいない。私が1人で映画を観ているしかなかったのがその証拠である。

友人の課題が終わるのを待ちながらだらだらと映画を観て、たまに始まる10分程度の雑談に交わる機会を伺うくらいなら、一度帰宅して、集中できる部屋で1人、発音の練習でもしていた方がいい。そしてそのあとの夕食時に、その日学んだことを毎日アウトプットしてみたら、これはかなり綺麗に整えられた言語学習生活になる。

そういうわけで、最近は授業が終わったら即帰宅して、家で1人、ディズニー映画を演じている。虚空に向かって「見てごらん、シンバ。太陽の届くところすべて、我らの王国だ(英語)」とか言っている成人男性を想像して頂きたい。プークスクス。

少し話が変わる。英語学習に対する姿勢についての話である。留学のゴール地点は人によって異なっていて、それ次第で生活の在り方というのも変わってくるだろうが、アメリカ留学をする人の多くにおいては、英語が話せるようになりたい、というのがブレないところであろう。もしも、できるだけ流暢に、ネイティブスピーカーのように話せるようになりたいというのであれば、私は、「考えながら話す」ことを怠ってはならないと思う。留学において大切なことという「発音や文法は気にせず、ガンガン話す!」というのはよく言われる話だ。私も反対ではないのだが、少し言葉の綾があるのではないかと思う。つまり、「発音や文法を意識しすぎてガチガチになって、全然話せない」のが良くないということであって、「発音や文法は重要ではない」という意味ではない。そこをはき違えている人が、まあ、いないとは言えない。ガンガン話しかけることも重要だが、思考停止でガンガン話しかけているだけでは、一生カタコトのまま。もちろん、「伝わればいい」という考えもあって、それは言語学習のモチベーションとして私も大いに賛成するところではあるが、あくまで聞き手側、ネイティブスピーカーの(こう言いたいのかな?)という予測に頼っているということは忘れてはならず、いつまでもそのままではいけない、というのが私の意見である。失敗を恐れずにガンガン話しかけ、会話に慣れていこうとするその傍らで、自分の発音を見直し、複雑な文法で話そうと挑戦すること、それを継続していると、結果は目に見えて現れてくる。今の自分の発言は正しかったらどうか。文法に誤りはないか。冠詞に間違いはないか。発音はこれで良いか。結局英語が私にとって第二言語である以上、これは学習だ。ただただ毎日喋っているだけで身につくというものではないと思っている。

ただまあ、これはたった4か月の留学から出てきた中間報告である。結果を見てみなければ、考え続ける方法と、話し続ける方法、どちらが人の英語力を上達させるかなど言い切ることにはできない。つまり、これも模索に過ぎない。5月になり帰国する頃、後輩に「英語できるようになったか気になってたんだよね」と言われて致命傷を負わないよう、日々おびえて勉強している。

私には分からない。ずっとそうだ…。自分のやり方を信じてても…共に学ぶ友人のやり方を信じてても…結果は誰にもわからなかった…。だから…まあせいぜい…悔いが残らない方を自分で選ぶと思います。

ちなみに、大学への報告書を「退屈な生活だ」と大変に舐め切った態度で書き下ろし、文中に100文字近くも使って進撃の巨人のセリフをぶち込んでいる私だが、実はべ切に遅れている。先週パソコンの充電器を紛失し、作業ができなかったからだ。この国では、紛失した私物は基本的に戻ってこないのだ。教務・学生室の方々、本当に申し訳ありません。



留学開始から 4 か月が経ち、前期のみの留学で帰国する留学生たちとの別れの時が来た。日本人の半数近くを含む。ルームメイトの彼もその 1 人だ。毎日一緒に過ごしていたので、遂に帰ってしまうと思うと、とても寂しい。と言いたいところだが、実際のところ、彼には彼女ができて、ここ 2 か月私の部屋に全く帰ってきてないので、驚くほどへっちゃらである。変わったことと言えば、部屋に置いてあった教科書のパッケージのごみが無くなったことくらいだ。しかしつい先日入国したと思ったら、あっという間にこんな時期になっていた。きっと私の帰国も、驚くほど早く訪れるのだろう。残り 5 か月。何をして過ごしていこうか。

